



長澤鐵隆

12

長澤鐵隆

弘化四―大正十年（一八四七―一九二二）

宮城県仙台市生まれ。

仙台原町南ノ目（現在、仙台市宮城野区原町）曹

洞宗江国山陽雲寺の第二〇世。



13

三井高堅

三井家は三井高利（一六二二―一九四）を家祖とし、江戸時代から現代に至る豪商・財閥。高堅は新町家九代。

高堅は大変な蔵書家であり、三井記念美術館所蔵の聴水閣コレクションは高堅が収集した中国古拓本として有名。

後 跋

足かけ七年にも及んだ和漢書整理もとうとう終わりを迎えた。目録が完成したという安堵感と同時に、この作業に携われた喜びがこみ上げてくる。そして、この作業を支えてくださった多くの方々に、今はただただ感謝の気持ちで一杯であるが、この機に編集の経緯や主旨等について、若干述べておきたい。

当館所蔵の和漢書の入手経路は記録がないため明確ではないが、『梅檀学園七百年史』を参考に考察すると次のようになる。明治三十五年東二番丁に宗門人育成のために曹洞宗第二中学林が設立され、その後大正七年四月に中学林内の文芸部の付帯事業として図書室が設置された。その際に、各先生方や生徒が図書を寄贈したという記述があるので、現在所蔵の和漢書の一部はこのとき収集されたものと思われる。しかし、当時二度の火災があり、大正十三年五月の二度目の火災時に「図書教具が一切烏有に帰した」と記録にあるので、これ以前に寄贈された資料は殆ど焼失したようである。資料の蔵書印をみると、現在数点ではあるが「曹洞宗第二中学林」のものが残存するので、このときに無事であった数少ない資料か、あるいはその後大正十五年に梅檀中学校と改名される間に寄贈された資料だと推測できる。その他の大半の資料は、梅檀学園で教鞭をとられた先生方、また曹洞宗関係寺院から寄贈されたものと、昭和三十三年に東北福祉短期大学が設置される際に収集されたものと思われる。

和漢書の整理作業は、平成十二年九月から始まったが当初は目録を作るなどという大掛かりな構想はなく、本学の講師でもある萱場健之氏の指導による「和漢書に関する勉強会」として館内で開始されたのが始まりである。

萱場氏は『宮城縣図書館漢籍分類目録』を始め宮城県内の和漢書整理を多く手がけている方であり、平成

十二年四月から本学の講師として就いたのを機に、本学図書館の旧館長であった及川三千男館長と旧知の間柄であることもあり、萱場氏による勉強会が開催され、これがのちに和漢書目録作成として発展した。

こういった経緯で整理作業が始まったわけだが、この作業が開始される以前に、当館所蔵の和漢書資料が全く手つかずの死蔵であったというわけではない。以前当館に勤務されていた安孫子敬子氏が、日本十進分類法による和漢書の目録カードを作成していた。これが我々担当者にとって大変参考になるものであった。さらに、和漢書一点一点が安孫子氏手作りの帙に入っており、大変な作業であったことが伺えると同時に、古書に対する愛情が感じられた。この思いを引き継ぎ、漢籍分類に使用される四庫分類法（四部分類法）を取り入れた新たな整理を進めることとなった。

作業は、まず原稿となるデータシートの記入からであったが、初めてのことで分からないことが多く、萱場氏の指導を受けながら作業を進め、書き上げたデータシートの添削を受けるという方法であった。萱場氏の講義の日程に合わせて、講義期間中週一回、またそれ以外の期間は隔週というペースで添削をしていた。き、それから担当者がそれぞれ時間をみてデータシートを作成していった。次にそのデータシートをカードに起こす作業があり、基本的に旧漢字を使用するということで、カードへの記入はすべて手書きとされた。データシート記入の段階では、高橋ノリ、田上けい子、石川聡子、八巻千穂の四名が担当者としてこの作業に携わっていたが、平成十三年十月に田上氏がこの作業から外れて、平成十五年九月に高橋氏が退職されたことで担当者は半減した。また、編者も学内の人事異動により平成十八年四月に図書館を離れることとなった。

和漢書の冊子体目録の刊行が図書館業務として進められることが平成十三年十一月に決定し、その年の十二月に第一回目の作業計画案を作成した。当初は平成十四年度末までに冊子体の目録を刊行する予定であったが、当時、作業に対する読みが甘かったことと、慣れない漢籍にかなり悪戦苦闘したこと、また考えてい

た以上に仏書が多く参考となる目録も少なかったことが計画通りに進まなかった理由であった。そこで平成十五年十月に再度作業計画を立て直し、冊子体目録の刊行目標を平成十六年末に掲げた。この時点で漢籍四二八点（三、一九六冊）のデータシート及びカードがほぼ完成していたが、和書五七二点（一、四〇八冊）の整理がまだ残っている状態であった。段階的にはあるが学内人事や退職により、実質的に作業に携わっていた担当者が半減したことと、図書館内の他の業務により思うように作業時間が取れなかったために、結局この目標も達成することができなかった。度重なる作業計画の変更を余儀なくされたが、平成十九年二月に印刷する運びとなり、発注作業の準備を進めることとなった。開始当初の予想を遥かに上回る時間と労力を要したが、日々一点一点古書と向きあう時間は大変貴重で豊かな時間であった。

当館の和漢書の整理に携わりながら、全国漢籍研究会主催の夏期研修会、京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センターで行われる漢籍担当職員講習会や、国文学研究資料館の和書整理講習会等へ参加し、各先生方からの指導・助言を受けられたことは大変貴重であった。実際の整理作業の手法のみならず各分野の知識を得ることができたことは、その後の整理に大変役立った。

最後に、目録完成まで献身的にご指導くださった萱場先生、資料提供等ご協力くださった方々、特に全国漢籍研究会東北支部のみなさまに深く感謝の意を表するとともに、常に暖かな配慮を与えてくれた館長・課長をはじめとする館員のみなさんに謝意を表します。

平成二十年三月

東北福祉大学

図書館司書 八巻 千穂

略年譜

平成

十二年 七月 萱場健之氏が来館、貴重書庫内を見学する。

「貴重書庫内の和漢書資料を整理する必要があるのでは？」という提案がある。

十二年 九月 萱場健之氏による和漢書についての勉強会を本学貴重書庫にて開催。参加者は石川聡子・大島真理・高橋ノリ・田上けい子・八巻千穂以上五名。

同月 萱場氏の指導の下、高橋・田上・石川・八巻の四名で漢籍データシート記入作業開始。

十三年 十月 田上けい子データシート作成担当から外れる。その他の三名で作業は続行される。

十三年十一月 当館所蔵和漢書目録冊子体の刊行が図書館業務として進められることが決定。

十三年十二月 第一回和漢書目録作成計画目標を検討し、平成一四年度冊子体目録刊行を計画。

十四年 八月 全国漢籍研究会夏期研修会（会場：実践女子大学図書館）に石川・八巻の二名が参加。

十五年 三月 全国漢籍データベース協議会第三回総会に八巻参加。

十五年 九月 高橋ノリ退職。和漢書整理担当者は、石川、八巻の二名になる。データ収集開始時から、担当者数は半数になる。

十五年 十月 漢籍（四二八点、三、一九六冊）のデータシート及びカード作成ほぼ終了。

同月 第二回和漢書目録作成計画目標の再検討。平成十六年度末に目録刊行予定とする。

十五年十一月 和書のデータシート作成・カード作成開始。

十六年 三月 全国漢籍データベース協議会第四回総会に石川参加。

- 十六年 八月 全国漢籍研究会夏期研修会（会場：筑波大学附属図書館）に石川・八卷の二名が参加。
 十六年十一月 京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター主催、平成十六年度漢籍担当職員講習会（中級）に八卷参加。
- 十七年 三月 全国漢籍データベース協議会第五回総会に八卷参加。
 十七年 八月 全国漢籍研究会夏期研修会（会場：筑波大学附属図書館）に八卷参加。
 十七年 十月 和書の整理中、本学の教員であった濱田廉氏の写本が一点見つかる。
 和書五七二点、一、四〇八冊分のデータシート及びカード作成終了。
 漢籍・和書インデックス作成開始。
- 十八年 一月 国文学研究資料館主催、第三回日本古典籍講習会に八卷参加。
 十八年 三月 全国漢籍データベース協議会第六回総会に八卷参加。
 十八年 四月 八卷図書館から教学部教務課へ人事異動。
 毎週月曜日の萱場氏の指導による整理作業は以前同様行われる。
 十八年 九月 漢籍・和書インデックス作成完了。
 蔵書印・蔵書表等の確認作業。
- 十九年 三月 目録出版へ向けての発注作業開始。
 笹氣出版印刷（株）と目録印刷の契約をする。
 全国漢籍データベース協議会第七回総会に石川参加。
- 十九年 六月 初稿。
 十九年 七月 笹氣出版印刷（株）との初稿に関する話合いおよび打合せ。
 十九年 八月 再校。

- 十九年 十月 参校。
 十九年十二月 四校。
 二十年 二月 五校。
 二十年 三月 校了。